

## 書評

Paul A. Roth

*Philosophical structure of historical explanation* (Northwestern University Press, 2020)

近年、歴史の分析哲学が再興の兆しを見せつつある。分析哲学において、歴史学に関する議論は1960年代ごろに盛んに行われていたものの、それ以降はずっと下火のままであった。しかしながら、60年代以降の議論を総括した上で、議論を再開しようとする動きが見られる。その成果は論文誌上でのやりとりや、論集、著作などの形で現れている<sup>1</sup>。

その中で重要な位置を占めるのが本書である。著者 Paul Roth は歴史の分析哲学に80年代後半から継続的に取り組んでおり、この分野が低調な中で、分野を支えてきた数少ない人物の一人である。近年の議論再開の動きの中でも彼は重要な役割を担っている。そんな彼の議論を体系的に一冊にまとめたのが本書である。

内容の紹介に入る前に、もう少し広い文脈から本書の位置づけを説明しておきたい。歴史の分析哲学が低調であった一方で、1980年代以降は歴史学における言語論的転回に呼応するように、過去の実在性や過去の表象可能性などの様々な哲学的問題について、狭義の哲学者に限らない様々な立場から議論がなされた。特に代表的なのは、文芸批評の理論を用いて史学史上の著作を分析した Hayden White ([1973] 2017) *Metahistory* であろう<sup>2</sup>。この著作に代表される一連の議論の特徴は、文学的な形式としての「物語」と歴史の親和性を強調する点であり、それゆえに、Arthur Danto や Louis O. Mink など、歴史の分析哲学における物語論者との類似性や連続性がしばしば主張される。そして本書の議論もまた Danto と Mink の強い影響下にある。

しかしながら、本書の議論は、White に代表されるような、歴史と文学の親和性を強調する議論とは袂を分かっている。Roth は White を名指しながら、White の関心は

---

<sup>1</sup> 著作と論集についてのみ例を挙げると、以下の著者は議論の火付け役の一つである。Kuukkanen, Jouni-matti. 2015. *Postnarrativist philosophy of historiography*. Palgrave Macmillan. また、以下のように、Kuukkanen や Roth を交えた学術的会合の成果をまとめた論集や、分野の今後に向けた提言を集めた論文集が出版されている。Brzechczyn, Krzysztof (ed.). 2017. *Towards a revival of analytical philosophy of history: Around Paul A Roth's vision of historical sciences*. Brill-Rodopi; Kuukkanen, Jouni-matti (ed.). 2020. *Philosophy of history: Twenty-first-century Perspective*. Bloomsbury.

<sup>2</sup> White, Hayden. [1973] 2017 『メタヒストリー——九世紀ヨーロッパにおける歴史の想像力』作品社。[原著: *Metahistory* (Johns Hopkins University Press)]

文学的技法としての物語にあるのであり、歴史の認識論という本書の関心とは交わらないと論じる。Roth の関心は、むしろ、歴史学における言語論的転回としばしば関連付けられる Danto や Mink の議論のエッセンスを、近年の科学哲学における説明や理解に関する議論の中に位置づけ直すことにある。

さておき、内容の紹介に進もう。本書は結論を除いて全7章から構成されるが、紙幅の都合上、以下では焦点を前半部(4章まで)に絞り、その概要を紹介したい。Roth の議論の根幹にあるのは、歴史を叙述することは歴史上の出来事の因果関係を説明することには尽きないという主張である。仮に歴史叙述(historical narrative)が因果の鎖の連なりに過ぎないのであれば、歴史叙述が特別に哲学的な関心を引くことはないだろう。その場合、因果関係の説明を分析すれば、それ以上歴史叙述について分析することは残らないからだ。歴史叙述の特性に関わる議論としては、物語の説明(narrative explanation)の固有性がしばしば主張される。だが、Roth の整理によると、因果関係の説明を組み合わせたもの以上の何かとして物語の説明を定式化している立場は存在しない。そのような中で、歴史叙述の特徴を反映した物語の説明の定式化を提案することで、物語の説明、ひいては歴史叙述の哲学的重要性を示そうというのが本書の目論むところである。

歴史叙述の特徴を浮かび上がらせるため、Roth は Arthur Danto の物語文という概念装置を援用する。歴史学における説明については、Hempel の説明モデルをめぐる1960年代ごろに盛んに議論がなされており、Danto はその中で Hempel に反対の論陣を張った重要人物の一人である。Danto の定義によると、物語文とは、歴史上の二つ以上の時点を関連付け、その中で先行する出来事を記述する文である。平たく言えば、歴史叙述において、「～が～を先取りしている」、「～の起源は～にある」といった仕方で、離れた時点の出来事を関連付ける文である。例えば、「アリストタルコスがコペルニクスの地動説を先取りしていた」という文は、紀元前2世紀と16世紀という離れた二つの時点を関連付け、そのうち先行する時点(つまり紀元前2世紀のアリストタルコス)を記述している。

Danto によれば、物語文のある特徴が、歴史叙述の特性を考える上で重要となる。その特徴とは、物語文は回顧的にしか用いることができない、つまり、記述対象となっている当の時点では用いることができないことである。例えば、紀元前2世紀の時点で、「アリストタルコスはコペルニクスの地動説を先取りしている」などと発話するのは意味不明である。このような文が歴史叙述に出現するということは、過去に起こったことを忠実に記述する以上の機制が歴史叙述において働いていることを示している。

事実、紀元前2世紀に起こったことをどれほど詳細かつ正確に記述しても、上の文は得られない。歴史叙述は単に事実を寄せ集めているのではなく、諸事実を一定の関連性の下で記述しているのである。

Rothはこの物語文という概念を用いて、歴史叙述にさらに特徴があると主張する。その特徴とは、歴史叙述には特権的な出来事の単位が存在しないということである。この主張は以下のような議論から導かれる。まず、物語文の性質を踏まえると、過去の総体を反映した唯一の歴史叙述は存在しえない。なぜなら、時間の流れが止まらない限り、まだ使えない物語文が存在してしまうからだ。例えば、新古典派の芸術家はロマン派に先立って存在しているが、ロマン派が出現する前に彼らを新古典派として記述することは不可能である。つまり、ロマン派の出現以前には、新古典派の芸術家たちに関して何かを捉え損なわざるをえない。このようなわけで、過去の総体を反映した唯一の特権的な歴史叙述は存在しえない。ゆえに、それに照らして特権的な出来事の単位を探り当てることも原理的に不可能であり、各々の歴史叙述が各々の単位で出来事を記述することになる。

物語の説明はこのような歴史叙述の特徴を備えた説明である。すなわち、物語の説明とは、被説明項がそのようなになっているのはなぜかという問いに対して、その答えとなるような時系列を提示することであり、その時系列および被説明項は物語文から構成される。例えば、次のような出来事に説明を与えることを想像しよう。「フェミニズムの先駆者である社会思想家のメアリ・ウルストンクラフトは無政府主義の思想家のウィリアム・ゴドウィンと結婚して娘を生み、二人の娘は後にメアリ・シェリーと名乗り『フランケンシュタイン』の著者となった」。この被説明項は後の時点を参照して先行する時点を記述する典型的な物語文である。なぜそうなったのかを説明するには、彼女が生んだ娘が『フランケンシュタイン』を執筆するまでの経緯を跡付けることになる。

物語の説明は、物語文から構成されるために、いくつかの特徴を持つ。中でも重要なのが以下の二つである。第一に、物語の説明は一般理論が存在しないような出来事を説明の対象とすることがある。例えば、メアリ・ウルストンクラフトの娘が『フランケンシュタイン』の作者になったことを説明するとして、子供が小説家になることを予測できるような理論は存在しない。このような事例は、自然科学の理論で対象の出来事を説明できる場合とは対照的である。歴史叙述には特権的な出来事の単位は存在しないので、一般理論が存在しないような出来事が説明の対象になることもある。

第二に、物語の説明を構成する物語文は、理論に基づく記述の中には含まれない。

例えば、「メアリ・ウルストンクラフトとその夫ウィリアム・ゴドウィンの間に娘が生まれた」ことを、生物学的な一般化に基づいて説明することは可能であり、既存の科学的説明のモデルに照らしても科学的説明の資格を持つだろう。だが、この説明は物語文を欠いている。なぜなら、上の例と異なり、説明を構成する記述が後の時点を参照していないからだ。例えば、「フェミニズムの先駆者である」という後のフェミニズム運動を参照した記述はこの説明には含まれていない。別の例として「1618年に三十年戦争が始まった」という記述が歴史叙述に登場した場合を考えてみよう。これは物語文である。なぜなら、この記述は、1618年から1648年のいくつもの戦闘を回顧的に総括して初めて利用可能だからである。裏を返せば、1618年の武装蜂起の経緯を一般化に基づいて説明しても、この記述は得られない。一般化に基づいて出来事の因果関係を説明しても、それだけでは物語的説明を構成する物語文は得られないのである。

このようなわけで、Rothによると、物語的説明は物語文を説明するため、理論的な一般化を利用することができない。物語的説明は、後の出来事が前の出来事の結果になるように時系列を構成することで説明を果たすのであり、そこに一般化は働いていない。このような特徴により、物語的説明は既存の科学的説明の類型から区別される。

以上の紹介はごく概略的なものであり、紹介や検討ができなかった論点は多い。例えば、Rothは以上の物語的説明の特徴に関する議論を、『科学革命の構造』の解釈に関する議論やIan Hackingの動的唯名論と結び付けており、こちらも検討に値する興味深い議論だが、ここでは紹介できなかった。だが、本稿で紹介してきた論点は本書の価値を語る上で特に重要な部分である。というのも、上の議論で中心的な位置を占めているDantoとMinkは科学的説明論争においてはほぼ忘れ去られていた存在であり、彼らの議論から興味深い論点を掘り起こして現況の議論に位置づけ直そうとしている点で、本書は大変な労作であるからだ。評者としてはRothの議論に不満もあるが、歴史に関する分析哲学的な議論の叩き台を提供してくれている本書は貴重である。本書がさらなる議論の呼び水となることを期待したい。

(苗村弘太郎、京都大学非常勤講師)